並列複合語としての等位接続句

談話情報から見た認可条件

西牧和也

1. 導入: 並列複合語 (dvandva) と等位接続

英語では、*and* を用いた等位接続によって形成される句表現を、その構成要素の上位語に置き換えることが可能な場合がある。例えば、(1) において、*brothers and sisters* を *siblings* という上位語に替えても、文法性は変わらず、更に、文脈的な違いも生じない。

(1) The oldest children in families are often domineering toward their younger brothers and sisters.

(英辞郎 on the WEB Pro, s.v. *brothers and sisters*, 下線は筆者による)

以下では、当該の句表現を、等位接続句と呼ぶことにする。構成要素の上位語と交替可能な等位接続句は、日本語では、並列複合語 (dvandva) として知られる等位複合語に対応する。興味深いことに、英語には、並列複合語が存在しないとされている (e.g. * *brother-sister*) (Shimada (2013) 参照)。(1) の *brothers and sisters* であれば、対応する日本語は「兄弟姉妹」という並列複合語になる。以上のような事実に基づいて、Nishimaki (2022) は、英語では、構成要素の上位語と交替可能な場合、等位接続句が並列複合語としてのステイタスを持つと分析している。この分析に従えば、(1) の *brothers and sisters* は、形式は句でありながらも、そのステイタスは (並列) 複合語ということになる。ここで注目すべきは、並列複合語としてのステイタスを持つ等位接続句を、対応する上位語に置き換えると、(1) とは異なり、文脈的な違いが生じる場合があるという点である。本稿の目的は、そのような違いがある場合、どのように、当該の等位接続句が認可されるのか、認可の仕組みを明らかにするともに、その使用によって、コミュニケーション上、どのようなストラテジーが利用可能となるのか、その可能性を探ることである。

2. 並列複合語の定義

Nishimaki (2022: 398) は、Bauer (2008: 2) の考察に基づき、並列複合語の構成要素は 2 つで 1 つのものとして解釈される、つまり、単一概念化されると観察している。そして、Wälchli (2005: 5) によると、並列複合語が表すのは、natural coordination という特定の等位接続になるという。Wälchli (2005: 5) に従えば、natural coordination とは、意味的に、密接な関連性があり、共起することが容易に想像できる要素が単一概念化されている等位接続になる。このことから、2 つの要素が単一概念化され、並列複合語が形成されるには、その 2 つは、natural coordination の関係になければならないということがわかる。以上をまとめると、並列複合語は、(2) のように定義することができる。

(2) 並列複合語において、2 つの構成要素は単一概念化され、natural coordination を表す。

3. 並列複合語としての等位接続句

等位接続句が、並列複合語としてのステイタスを持つというのは、(2) の定義に従うということに他ならない。このことは、(3) のように、数詞を伴う等位接続句の解釈から確認することができる。

(3) They have ten brothers and sisters. (Jespersen (1954: 189), 一部修正あり)

Jespersen (1954) は、(3) の *ten brothers and sisters* には、数詞 *ten* の修飾対象に応じて、2 通りの解釈があるとしている。1 つは、*10 brothers and 10 sisters* というように、*ten* が、等位接続されている名詞、それぞれの数を表すという解釈である。もう 1 つは、例えば、*2 brothers and 8 sisters* というように、*ten* が、等位接続されている名詞の合計数を表すという解釈になる。以下では、この解釈を合計解釈と呼ぶことにする。このような解釈の違いに基づいて、小早川 (2016) は、数詞を伴う等位接続句は、合計解釈の場合、その構成要素の上位語の代わりに用いられていると指摘している。例えば、*brothers and sisters* であれば、(1) で見たように、*brothers* と *sisters* の上位語である *siblings* と交替可能である。この意味において、合計解釈を持つ等位接続句の場合、その構成要素は単一概念化されていると言える。また、インフォーマントによれば、*brothers* と *sisters* は、同一家庭内の男の子供と女の子供を意味する点で、両者には密接な関連性が認められ、その等位接続は、直ちに、*siblings* という上位概念の想起に繋がるという。この意味において、その 2 つの構成要素は、natural coordination の関係にあると言える。以上を踏まえると、(3) の *(ten) brothers and sisters* のように、合計解釈を許す等位接続句は、(2) の定義に従っており、並列複合語としてのスタイタスが認められるのである。

4. 使用意図 (認可条件): 等位接続句 vs. 上位語

これまで見てきたように、並列複合語に相当する等位接続句は、構成要素の上位語と交替可能である。しかし、実際の使用場面を詳しく見てみると、その 2 つには、違いが認められる。例えば、(4) において、*five brothers and sisters* を、*five siblings* にすると、文法性は変わらないが、文脈的な違いが生じる。

(4) His family said that, on 27 August, he and his five brothers and sisters had been playing in the front yard of their home in the village of Deir al-Qanun south of Tyre when he picked up a canister type cluster bomb that then exploded.

(英辞郎 on the WEB Pro, s.v. *brothers and sisters*, 下線は筆者による)

Siblings は、性別の違いに言及しないので、これを使用した場合、その内訳として、*brothers* と *sisters* の両方が含まれるのかどうかが、曖昧となる。(4) において、*brothers and sisters* が使用されている背後には、この曖昧さを避け、*brothers* と *sisters* のそれぞれに言及したいという話者の意図があるものと考えられる。(4) は、ニュース記事の一節であるが、そのような場合、通常、「いつ、どこで、誰が、何を」というような情報をできるだけ正確に読者に伝達する目的がある。このような文脈においては、爆発が発生した時に自宅の庭で遊んでいたのが、*brothers* と *sisters* の両方であったというのは、伝達すべき重要な情報であると言える。実際に、インフォーマントに確認したところ、(4) で、*siblings* ではなくて、*brothers and sisters* を用いることで、自宅の庭で遊んでいたのは、*brothers* と *sisters* の両方であることがはっきり伝達されるという。

これまでの考察から、等位接続句が並列複合語としてのステイタスを持つ場合、その構成要素は、等位接続によって、その上位語と同等の単一概念を表すものの、それぞれは、独立した指示性を持っていることがわかる。まさに、これは、「単一概念化」という並列複合語としての特徴に由来する効果なのである。並列複合語の構成要素に独立した指示性があることは、それぞれの構成要素を、「(お) 互い」というような相互代名詞で指示することができる (e.g.「夫婦は互いを励ました。」(Kageyama (2009: 515))) ことからわかる。つまり、並列複合語に相当する等位接続句が使用される場合、話者は、「単一概念化」という並列複合語としての特徴を利用して、2 つのことを同時に意図していると考えられるのである。等位接続句の指示対象として、2 つの要素が一体化した集合を指定するという意図と各要素の指示対象にも焦点を当てるという意図である。そして、その場合に、並列複合語に相当する等位接続句の使用が認可されると考えられる。言い換えれば、当該の等位接続句は、2 つの要素の単一概念化された側面と個別化された側面、その両面に言及するストラテジーを話者に提供しているということになる。そして、このストラテジーは、並列複合語としてのステイタスを反映するものとして捉えることができるのである。

5. 結語

英語の等位接続句には、構成要素が単一概念化されているという点で、並列複合語としてのステイタスを持つものがある。そのような等位接続句の「単一概念化」という特徴を利用して、話者は、2 つの要素が一体化した集合を指示対象として指定することができる。単一概念化の結果として、等位接続句の指示対象は、構成要素の上位語のものと同一になる。しかし、その 2 つには、使用意図において違いが認められる。等位接続句が使用される背後には、一体化した 2 つの要素、それぞれの指示対象にも焦点を当てたいという話者の意図が見られる。つまり、並列複合語としてのステイタスを持つ場合、等位接続句は、2 つの要素の単一概念化された側面と個別化された側面、その両面に言及するストラテジーを話者に提供してくれることになる。そして、まさに、これは、「単一概念化」という並列複合語としての特徴に由来するものなのである。

参考文献

Bauer, Laurie (2008) “Dvandva,” *Word Structure* 1, 1-20./ Jespersen, Otto (1954) *The Philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin, London./ Kageyama, Taro (2009) “Isolate: Japanese,” *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 512-526, Oxford University Press, Oxford./ 小早川暁 (2016)「「数詞+名詞+and+名詞」の文法」*JELS* 32, 52-58./ Nishimaki, Kazuya (2022) “Coordinated Phrases as Dvandvas: A Competition-Theoretic Perspective,” *English Noun Phrases from a Functional-Cognitive Perspective: Current Issues*, 395-427, ed. by Lotte Sommerer and Evelien Keizer, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia./ Shimada, Masaharu (2013) “Coordinated Compounds: Comparison between English and Japanese,” *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 10, 77-96./ Wälchli, Bernhard (2005) *Co-compounds and Natural Coordination*, Oxford University Press, Oxford.

辞書

『英辞郎 on the WEB Pro』(https://eowp.alc.co.jp/top)